

# あなたとの 相棒



人間誰しも、大切な人・物・場所があるはず…。府立生野高校写真部の皆さんと一緒に、そんな誰かのかげがえのない「相棒」を紹介します。第3回目は、三宅で「いづみや印刷所」を営む明瀬歳治さん・絢さんご夫婦です。

※今回掲載しきれなかった写真部が撮影した写真は市ホームページで見ることが出来ます。

変わりゆく時代を活字とともに

「暑い中よう来たね。冷たい井戸水で手洗つといでえ。」

着いて早々、二人の温かい声で迎えられた。印刷業に就いて70年。歳治さんは15歳の頃から働いている。

「当時はまだ戦時中。空襲があった頃は別所のほうに工場がありました。」

いづみや印刷所にはその時の木版が未だに残っている。一つひとつ手で掘られたもので、戦争

時代の標語や国防劇のチラシなど、当時の風潮がうかがえる時代の生き証人とも言えるものだ。

「今はコンピュータでデザインして、オフセット印



刷が主流。それは息子に任せています。私たちは当時も今も活版印刷です。」

活版印刷は、シンプルで基本的なしくみ。印刷される部分がほかより一段高く、そこにインクを付ける構造。つまりハンコの原理だ。

一文字ずつ活字を拾

い、それを組んで版を作っていく。その作業量と技術は私たちの想像をはるかに超え、歳治さんと絢さんのぴったりあった息が活字とともに生きてきた年月を思わせる。その活字も、今では作る会社がめっきり減り、素材も鉛から樹脂へと変わった。

「昔はもっといっぱい活字もあって。色んなフォントや大きさの違いでね。」  
それでもこれだけの活字が現存しているのは珍しいのではないだろうか。  
現在は伝票のナンバーを主に手がけている。連番でセットした数字の版を回して刷るため、活版印刷に適しているのだ。その他にも名刺や封筒などの受注もしている。

印刷所で一番古い機械は40年前からのもの。  
「単純な作りやけど、だからこそ長持ちするんです。」

時折、油をさしてやる。手がかかり子ほど可愛い、二人の相棒だ。紙を流すと40年ものとは思えぬ速さで動き出す。

歳治さんの宝物はもう一つ。今は亡きお隣さんからいただいた「硯箱」。少し涙ぐみながら思い出を話す目に映るのは、地域への、そして文字への歴史と愛だ。

